

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## ゾラ『愛の一ページ』における感覚の諸相

著者	高橋 愛
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	63
号	2
ページ	79-90
発行年	2016-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/12654">http://hdl.handle.net/10114/12654</a>

# ゾラ『愛の一ページ』における感覚の諸相

高 橋 愛

エミール・ゾラ（1840-1902）が『ルーゴン＝マッカール叢書』*Les Rougon-Macquart*（1871-1893）の第八巻として著した『愛の一ページ』*Une page d'amour*（1878）は、パッシーで暮らす未亡人エレーヌ・グランジャンと娘ジャンヌの私生活を軸とし、エレーヌとアンリ・ドゥベルル医師との関係も描きながら展開する物語である。各部の末尾では、主人公が自宅の窓から外を見渡し、季節や天候、時間帯によって変化する風景は、それぞれの場面における母子の内面と重なる。これらの描写は小説の五部構成を支え、今日まで多くの論考で扱われてきた。

しかし、この小説における視覚以外の感覚の表象に関しては、十分に検討されてこなかった。アラン・コルバンは『においの歴史』*Le miasme et la jonquille—L'odorat et l'imaginaire social 18<sup>e</sup>-19<sup>e</sup> siècles*（1982）でゾラ作品にみる嗅覚に新しい光を当てたが、彼の分析に照らして『愛の一ページ』を読み直すと、作中人物の生活空間やブルジョワジーの生態はいっそう鮮やかな輪郭をもって浮かびあがる。コルバンが指摘する通り、ゾラは「視覚と聴覚という知的かつ美的な感覚と、嗅覚と触覚という植物的かつ動物的な生命の感覚とを同次元においた<sup>1</sup>」作家なのであり、ヨーロッパで歴史的に下等と見なされてきた感覚の重要性を認めて、小説の中で大きな意味を与えた。本論では、『愛の一ページ』で描かれたさまざまな感覚の様相に注目し、それらの意味を考察する。

## 1. 死へ向かう音

感覚という点でみると、ゾラが『愛の一ページ』で最初に描き出すのはエレーヌの聴覚である。この感覚を通じて、娘の看病に明け暮れる主人公の人生、彼女が身をおく深い闇が徐々に浮かびあがる。第一部の冒頭を見てみよう。

静寂が続くなか、振り子時計が一時を知らせた。街も静まり返っている。トロカデロの高台には、パリの軒だけが遠方から聞こえてくる。エレーヌのかすかな寝息は安らかで、その喉が

---

<sup>1</sup> Alain Corbin, *Le miasme et la jonquille—L'odorat et l'imaginaire social 18<sup>e</sup>-19<sup>e</sup> siècles*, Paris, Aubier Montaigne, 1982, p. 242. [邦訳：アラン・コルバン『においの歴史——嗅覚と社会的想像力』山田登世子・鹿島茂訳，新評論，1988.]

見せる清らかな輪郭線も乱されてはいない。[…]

二時の鐘が鳴ると、この静けさは乱され、小部屋の闇から一つのため息が聞こえてきた。次いで、シーツの擦れる音がし、再び静寂が訪れた。すると、今度は、苦しそうな息づかいが聞こえた。エレヌは身動きせずになっていたのだが、突如として身を起こした。苦しんでいる子どもの混乱した片言によって、目が覚めたのだ。寝ぼけたまま、こめかみに手を当てていると、かすかな叫び声が聞こえたので、絨毯の上に飛び降りた。

「ジャンヌ！ジャンヌ！どうしたの？返事をしてちょうだい！」<sup>2</sup>

ここでは、音を通じて、病弱な娘を抱えた母親の人生が少しずつあらわれてくる。主人公の聴覚は研ぎ澄まされ、就寝中も室内のわずかな音を感じ取る。彼女の耳は、まず娘のふっとした「ため息」を、次いで「シーツの擦れる音」を捉える。「苦しそうな息づかい」と「混乱した片言」が続いて聞こえ、徐々に強まる音は最後に「叫び声」となる。エスカレートする音とジャンヌの病の重さが結びつき、それらを聞くエレヌの不安は段階的に高まっていく。エレヌの聴覚をめぐる世界は、ジャンヌが落ちていく死の恐怖と結びついている。娘が一命をとりとめると、看病で疲労困憊した母親は「虚ろな目をして、頭の中が真っ白になってしまう<sup>3</sup>」。それでも、彼女は「子どもの呼吸に耳を傾ける<sup>4</sup>」のである。

冒頭場面があらわすように、エレヌの人生には聴覚を通じて死がまわりつく。娘と離れている時間も「死へ向かう音」は彼女につきまとい、慈善訪問したフェチュ婆さんの家を出ると、次のような声が聞こえてくる。

階段を上っていると、猫の鳴き声が再び聞こえだした。それは、断末魔の喘ぎを洩らしているような、あまりにも哀れな声だった。古井戸に可哀そうな猫が捨てられ、飢えてじわじわと死を迎えようとしていると思うと、不意にエレヌは胸が張り裂けるような苦痛を感じた。彼女は歩調を速め、当分の間、この階段を使うことはやめようと思った。死に瀕した猫の鳴き声が聞こえてくるようで、恐かったのである<sup>5</sup>。

貧困と退廃が漂うフェチュ婆さんの部屋を去り、帰途につくエレヌがオー小路で聞くのは、古井戸に捨てられた猫の鳴き声である。その声は迫る一つの死を伝え、主人公に恐怖を抱かせる。第四

---

<sup>2</sup> Emile Zola, *Une page d'amour dans Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes par Henri Mitterand, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, tome II, 1961, pp. 801-802. 本文中の引用は、次の既訳を参考にして筆者が訳出した。エミール・ゾラ『愛の一ページ』《ゾラ・セレクション》第四巻、石井啓子訳、藤原書店、2003.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 810.

<sup>4</sup> *Idem.*

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 832.

部に至って、この猫の悲痛な声もジャンヌの死に逢着する。嵐の日にオー小路を再訪したエレーヌはアンリに身を任せる。彼女が人生の深みに足をすくわれたとき、ジャンヌは「母親に見捨てられた」と信じ、自室の窓から吹き込む雨風を浴びて倒れている。「溺れた女」(une noyée<sup>6</sup>)と形容される少女の姿は、母親が過ごしている小路の名「オー」(Eaux)と「水」という点で連鎖し、ジャンヌが開け放した窓は「目に見えない泥で呼吸困難を起こさせる、瘴気を放つ井戸<sup>7</sup>」にたとえられる。パリの泥から立ち昇る蒸気とジャンヌの病が結びつき、その「井戸」を原因として、呼吸困難が進行する少女は古井戸の底へ捨てられた猫のような「断末魔の喘ぎ」を洩らす。第一部の猫の鳴き声は、第五部におけるジャンヌの喘鳴によって引き継がれるのである。

これらの例が示すように、エレーヌの耳に届く音はジャンヌの病と連結している。アンリとの関係によって「喜びがエレーヌを愛情で包み込む」ようになって、体調を悪化させたジャンヌの咳は続き、彼女の人生にたえず不幸の影を落とす。咳の音はエレーヌに「漠とした苦痛の感情」を与え、「重石のようであり、それによってできた打ち身は、言い当てられない彼女の身体はどこかで血を流す」のである<sup>8</sup>。アンリによるジャンヌの聴診は、この医師とエレーヌとの関係を深めるきっかけともなったが<sup>9</sup>、彼らのオー小路での「過ち」に起因するジャンヌの咳の音は、エレーヌをたえず厳しい現実へ引き戻し、彼女の重荷を思い起こさせる。徐々に強まる咳の音はジャンヌの体調の悪化を伝え、構造的に小説の冒頭を想起させるが、グランジャン家に赴いたアンリはその音を耳にして、エレーヌよりも先にジャンヌの死を覚悟する。

扉の向こう側からは、深い静寂を破って、しつこい咳のみが聞こえていた。[…]

アンリはかつて熱心に研究した一症例、急性肺結核のすさまじい進行の経過を思い出していた。粟粒結節が急速に増殖し、深刻な呼吸困難に陥って、ジャンヌは三週間ともたないだろう<sup>10</sup>。

アンリが「熱心に研究した」と書かれる肺結核が音と関わる病である点に注意したい。ルネ・ラエネクが1819年に聴診器を誕生させ、患者の特徴的な呼吸音に注目してから、肺結核は多くの医師の研究対象になっていた。ここで、ゾラはジャンヌの病をあらわす語として古くからの一般的な呼

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 1034. 本作品のためにオー小路を取材したゾラは、その坂道を降りながら、井戸の底で鳴く猫の声を実際に聞いている。Emile Zola, *Carnets d'enquêtes. Une ethnographie inédite de la France*, Paris, Plon, 1993, p. 42.

<sup>7</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 1030. ここでは、舗石の隙間から出た砂、悪臭を放つゴミ、馬糞などに淀んだ水が混じりあう不潔なパリの泥が示唆され、その泥から立ちのぼる蒸気への社会の強い関心、嗅覚による警戒心があらわされている。

<sup>8</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 1048.

<sup>9</sup> *Ibid.*, pp. 934-936.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 1060 et p. 1063.

称である「癆瘵」(phtisie)を最初に記しながら、それに「粟粒結節」(tubercules miliaires)という専門用語を続け、ジャンヌの咳の音から医学的見解を引き出し、その死期を判断できるのがアンリのみであることを示す。職業的な「耳」によって、アンリはジャンヌの症候を解するのだが、それをエレーヌには告げず、静かに立ち去る。咳の音によって、ジャンヌはアンリに自分の死期を知らせ、母親と医師の仲を引き裂き、その断絶を決定的にするのである。

ジャンヌの息づかいは、残されたエレーヌを苛み続ける。それは、自分を見捨て、恋人と過ごした母親への復讐のように、止むことなく室内に響き渡る。

昼夜を問わず、ベッドの天蓋の下では息づかいが聞こえていた。[……] 力尽きた母親は、娘の喘鳴に耐えられなくなって隣の部屋へ移り、頭を壁にもたせかけるのだった<sup>11</sup>。

喘鳴に苦しめられ、アンリと別れたエレーヌは、やがて娘の最後の「軽いため息」を認める。物語におけるジャンヌの「生」は、エレーヌが第一部の冒頭で聞く「ため息」によって開始し、その母親の耳を通じて終わりを告げるのである。ジャンヌの最期を看取り、完全な静寂の世界に包まれるエレーヌは、娘のみならず、自らが営んできた「生」も失っている。第五部の最終場面にみるエレーヌの様子が「失われた生」を語り、それは聴覚の世界によっても強調される。娘を永遠に失った主人公は孤高を持してパッシーの墓地に立ち、その高みから雪に覆われたパリを見下ろす。豊かな色彩も一切の熱も奪われた冷ややかな世界からは、もはや「声ひとつ昇っては来ない<sup>12</sup>」のである。

## 2. 香りが明かす愛

ジャンヌと閉塞的な日々を過ごすエレーヌは、聴覚によって日々の緊張を保っている。母親の傍らで娘があらわすのは鋭い嗅覚であり、最初にそれが明らかになるのは、第一部でアンリがジャンヌにエーテルを試みる場面である。エレーヌは「エーテルを嗅ぐと、娘は気が触れたようになる」と医師を制止するのだが、吸引後のジャンヌは「恐ろしい形相となり、眼は眼窩に埋もれ、青白い真珠のような白目を剥く」<sup>13</sup>。「二世代を越えた隔世遺伝<sup>14</sup>」を受け継ぐジャンヌは、曾祖母アデラ

---

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 1066.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 1091.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 806. この場面は、1847年から多くの医師に熱狂的に受け入れられたエーテルが、その使用にとまなう危険が慎重に検討されずに濫用され、患者の身体が医師たちに完全に委ねられていた当時の事情をうかがわせる。こうした問題については、次を参照。Sous la direction d'Alain Corbin, J.-J. Courtine, G. Vigarello, *Histoire du corps, 2. De la Révolution à la Grande Guerre*, volume dirigé par A. Corbin, Editions du Seuil, 2005, pp. 28-30. [邦訳：アラン・コルバン, J.-J. クルティエヌ, G. ヴィガレロ監修『身体の世界II』小倉孝誠監訳, 藤原書店, 2010.]

イード・フークの形質が強く見られる人物で、高等な感覚と見なされ、認識や思考と結びついた視覚や聴覚に重きをおく理知的なエレヌとは対照的である。嗅覚という動物的な感覚を発達させたジャンヌは「本物の貴婦人のように視線を漂わせ、虚ろな目をしてみせる<sup>15</sup>」といった表情があらわすように、視覚を通じて物事を精細に見ることができない。エレヌが音楽を学ばせようとしても、「静寂を破って近所からオルガンの音が聞こえてくると、身体を震わせ、涙ぐみ<sup>16</sup>」、その聴覚も望ましい状態とはいえない。著しく発達した嗅覚に頼り、物事を直感的に捉え、動物的にその本質を手繰ろうとする娘について、エレヌはアンリに「繊細、神経質、やきもちやき<sup>17</sup>」と説明するが、ジャンヌの嗅覚への偏りは、突発的で感情の起伏に支配されやすい性格を助長している。

ジャンヌの初診後、アンリがエレヌに説くのは「規則正しく、幸福な、心の動揺がない生活」の大切さであるが<sup>18</sup>、その日常において、慣れ親しんだ「良い匂い」は少女の平穩を支える重要なアイテムとなっている。ここでの「良い匂い」とは、母親と結びついた「ヴェルヴェーヌの香り」や、石鹸で身体を洗った後の「清潔な香り<sup>19</sup>」、ロザリーとゼフィランから感じられる「健康な香り」であり、外部からもたらされる新たな匂いはジャンヌに脅威を与えてしまう。

ジャンヌの匂いに対する鋭い反応は、エレヌ母子が初めてドゥベルル家を訪れる場面でも示される。エレヌは通されたサロンの「星のような眩さを放つ黒と金のカーテンと椅子」、「暖炉、ピアノ、テーブルの上で咲き誇る花」などを観察し、室内の輝きは「精選された環境によるもの」と考える。そのうえで「漆黒の髪と、ミルクのような白さを誇る肌」を持つ優雅なジュリエットに魅力を感じる。視覚からの情報でドゥベルル家を判断するエレヌに対して、ジャンヌはサロンに漂

<sup>14</sup> 『愛の一ページ』は1878年に単行本として出版され、ゾラはその巻頭にルーゴン＝マッカール一族の家系図を付した。ジャンヌ・グランジャンは「1842年生まれ。二世代を越えた隔世遺伝。身体的にアデライード・フークに似る」と書かれている。

<sup>15</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 835.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 822.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 809.

<sup>18</sup> *Idem.*

<sup>19</sup> 第四部において、ジャンヌはロザリーに石鹸で身体を洗ってもらう。19世紀初頭から、「身体をきれいにする石鹸」は「健康の道具」とみなされていた。皮膚のべとつきを洗い落とし、その呼吸機能が活発になると、身体全体に新しい活力とエネルギーが湧くと考えられたのである。この時期、「衛生」(hygiène)という新語が誕生し、健康を「維持」、「管理」することはフランス人の重要なテーマとなった。清潔の衛生学が身体の活力、体力の記号となった時代に、ゾラは病弱なジャンヌがその規範に合わせようとし、健康に関わる「清潔」を母親に見せる様子を描いたのである。この場面からは、西洋社会のなかに生まれた新たな自己充足的な領域、身体衛生があらわす倫理観などが浮かび上がる。時代背景については、次を参照。Georges Vigarello, *Le propre et le sale - L'hygiène du corps depuis le Moyen Age*, Paris, Editions du Seuil, 1985, pp. 154, 182-183, 186. [邦訳：ジョルジュ・ヴィガレロ『清潔になる〈私〉——身体管理の文化誌』見市雅俊監訳、同文館出版、1994.] ; Julia Csergo, *Liberté, égalité, propreté - La morale de l'hygiène au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Albin Michel, 1988, pp. 60-61. [邦訳：ジュリア・クセルゴン『自由・平等・清潔——入浴の社会史』鹿島茂訳、河出書房新社、1992.]



うヒヤシンスの強烈な香りを嗅ぎ、不快を覚える。

彼女「ジャンヌ」は時々、サロンに漂っている重く強烈な香りを嗅ぎ取っているようだった。ちらっと横目で家具を眺めながら、疑い深い少女は、その鋭敏な感覚によって、漠とした危険を察知していた<sup>20</sup>。

ドゥベルル家に立ちこめる未知の香りは、ジャンヌの猜疑心を呼び起こし、この少女に「漠とした危険」を意識させる。それは、母親との生活で築かれた秩序を脅かす「新しい何か」であり、目に見えない不安が、彼女を覆う「匂い」という形であらわされる。サロンでエレーヌとジャンヌを迎えるジュリエットは、たえず麝香の香りをまとって自己表現する女性である。この動物的な匂いは元来体の線を強調するコルセットと同じ機能を持ち、ジュリエットの性格を印象づけ、強烈な香りを漂わせる住まいとの合一もあらわす。ドゥベルル家の匂いを敏感に嗅ぎわけ、その実体に迫ろうとするジャンヌは、これらの新しい香りと接して張りつめていく。

コルバンは「ゾラ作品でブルジョワジーの欲情と感情の動きをつかさどるのは嗅覚である」と指摘するが、『愛の一ページ』の作中人物にも、その傾向は顕著にみられる。アンリはエレーヌの自宅に足を踏み入れ、妻の麝香とは対照的な淡いヴェルヴェーヌの香りを嗅ぎ、この女性の髪の毛の匂いも覚えて、「一人の女性のさらけ出された私生活」を感覚的に知る。彼は嗅覚を通じて、エレーヌの内密な世界に惹きつけられるのである<sup>21</sup>。ドゥベルル家の香りを吸いこむエレーヌも、徐々にブルジョワ的な欲望の律動に身をゆだねる。外部との接触を断ってきた未亡人の情感が目覚め、四月の午後にドゥベルル家の庭へ降りれば、蕾をつけたスイカズラの「ほのかな甘い香り」で華やいだ気分を味わう。ジュリエットが発散する強い匂いは、たえずエレーヌを「どこかのサロンに迷い込んだ」気分させる<sup>22</sup>。花壇に姿を現すだけで漂うジュリエットの麝香の香りは、ドゥベルル家の屋敷全体に流れ、それはブルジョワ世界の符号となる。「うわべの効果」で人を欺く香水は、労働と対極にある「消え去る」生産物で、「散財」の象徴とみなされる<sup>23</sup>。ドゥベルル家に集まる婦人たちは扇を煽ぐたびに衣装の下から同じ匂いを立ち昇らせ<sup>24</sup>、「香水の香りが混じるコーヒー」は部屋中に「熱い、むっとするような匂い」を充満させる<sup>25</sup>。紅茶の「染み透るような香り」にも、麝香の匂いはじっとりと混じり合う<sup>26</sup>。この匂いに包まれるエレーヌは、それを知らずと吸収し、自らもまといっていくのである。

---

<sup>20</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 816.

<sup>21</sup> Alain Corbin, *Le miasme et la jonquille – L'odorat et l'imaginaire social 18<sup>e</sup>-19<sup>e</sup> siècles*, *op. cit.*, p. 242.

<sup>22</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 879.

<sup>23</sup> Georges Vigarello, *Le propre et le sale – L'hygiène du corps depuis le Moyen Age*, *op. cit.*, pp. 150-151.

<sup>24</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, p. 981.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 977.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 984.

エレヌの変化に敏感なジャンヌは、嗅覚を駆使して、それに抵抗する。母親の愛を独占しようとする娘は、アパートマンに流れる不穏な空気を嗅ぎ、「私を騙しているわ、部屋にいるのはママだけではないでしょう」と言って、ヒステリーの発作を起こす<sup>27</sup>。そして、オー小路でアンリと過ごしたエレヌが帰宅すると、その身体から発される匂いによって、留守中の母親の行為を察する。

それはいつものヴェルヴェーヌとは異なる匂いだった。[…] とらえにくく、不快な匂いを嗅ぎ、そうした匂いが接近してくることに神経を高ぶらせ、ジャンヌはむせび泣いた。自分がそこで嗅いでいるのは裏切りの匂いであると理解したのだ<sup>28</sup>。

ジャンヌは帰宅した母親の「疲労でふさがり、小さくなった目」や「熱っぽい赤みを帯びた唇」、「顔全体を覆う奇妙な影」を見ても、その変化の実体までを掴むことはできない。しかし、何一つ語られなくても、「不快」、「裏切り」と形容される匂いを嗅ぎ、母親の秘密を知る。この時点で、ジャンヌの嗅覚から生じる意識は、触覚をとまなう嫌悪感にまで達する。ジャンヌはエレヌの「むき出しの手首、汗ばんだ掌、生暖かい指」に接して動揺し、「変わり果てたように思われる皮膚と触れ合って」、激しい苛立ちを覚える。母親の指は「前よりも伸びているとしか思えず」、掌は「柔らかさを帯びている」ように感じるのだが<sup>29</sup>、それはジャンヌが記憶したアンリの手の影響と重なっている。初めてアンリがジャンヌを診察したとき、この医師が「しなやかな長い指」で少女の首の脈を取ったのを思い出そう<sup>30</sup>。患者として触れられたジャンヌのアンリに対する皮膚感覚が、無意識に、母親の手を通じて蘇るのである。それは同時に、エレヌとアンリとの関係にみる嗅覚、触覚の世界もほのめかす。ジャンヌにとっては、耳に届く声も、もはや母親のものとは思われない。「いつものママとは違う…否定しないで。ママからはこれまでの匂いがしないの。もう終わりよ。死にたくなったわ。」と母親に言い放つジャンヌは、動物的な感覚に頼る不安定な生き様を露わにする<sup>31</sup>。

このように、エレヌとジャンヌの物語は、嗅覚を通じて独特の生々しさを帯びている。アンリがエレヌから立ち昇るヴェルヴェーヌの香りを覚え、エレヌがそれとは異なる匂いも身につけたとき、母娘の間には埋めがたい溝が生まれた。ジャンヌが「ヴェルヴェーヌの香り」を失った母親を許すことはない。少女は「固く閉ざされた暗い部屋」のベッドに横たわったまま、「長い間閉ざされた地下埋葬所を思わせる、湿った匂いと静けさ」の中で短い生涯を閉じる<sup>32</sup>。

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 949.

<sup>28</sup> *Ibid.*, pp. 1037-1038.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 1037.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 806.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 1038.

<sup>32</sup> *Ibid.*, p. 1074.



### 3. 味覚で結ばれた関係

死期が迫るジャンヌは孤立し、周囲との接触も拒むようになるが、ロザリーとゼフィランは例外であり、二人を病床に呼び寄せる。「すでに闇の中に降りてゆこうとしている」ジャンヌとは対照的に、グランジャン家に仕える料理女と恋人の兵士は「春の暖かさ」を感じさせ、彼らの丸まった背中からは「健康的な良い香り」が立ち昇る。寝室の窓から差し込む太陽は金色の埃となって恋人たちに降り注ぎ、彼らを前にして、ジャンヌは頭を震わせ、涙を流し、最後の人間的な感情をあらわす。ここでは、圧倒的な生と忍び寄る死が残酷に向き合っている<sup>33</sup>。

こうした場面でロザリーとゼフィランがあらわすのは、他の作中人物が持ちえない健康的な生である。脆弱な神経を持つジャンヌの人生は、ロザリーの健全な感覚に支えられ、持ちこたえてきた。たとえば、第一部では、買い物から帰ったロザリーの籠を探して楽しむジャンヌが、その底に隠された黄色のニオイアラセイトウを見つけて歓喜する場面がある。エレヌ母子はニオイアラセイトウの香りを分かち合い、その香りは固くなった二つの心を溶かす。ロザリーはジャンヌの独特な嗅覚を理解し、沁みとおるような香りを部屋中に満たすことができるのである<sup>34</sup>。

ボース地方で育ったロザリーは「美味しく食べる」喜びを知る人物で、食欲という自然な性向に大らかな農村出身のカトリック信者である。彼女はエレヌたちに「故郷では、主任司祭は食べ物のことを実に良く知っていたし、台所に入らなくても、匂いを嗅ぐだけで、その日の夕食が何かを言い当てられた<sup>35</sup>」と述べ、食に関わる優れた感覚を人間の然るべき長所として讃える。健啖家のゾラが、ロザリーに語らせる司祭のような嗅覚を持っていたのは記憶されて良い<sup>36</sup>。グランジャン家で働くロザリーは、清潔に保った台所を家の中で「もっとも陽気で、真っ白に光り輝く」空間にする<sup>37</sup>。彼女のささやかな楽しみとは、整理整頓された台所で「タイムとローリエの芳香に包まれて」ゼフィランを待ち、「何ていい匂いだろう!」と喜ぶ恋人の食欲を満たすことである。ゼフィランはロザリーの調理を手伝い、台所から持ち帰る「タイムとローリエの良い香りに心地よい快感」を覚える。ゾラは「彼らの恋は片づけられた台所用品の秩序を乱すことのない、非常に静かな落ち着きを見せていた。ふたりの表情は竈からの良い匂いでぱっと明るくなり、食欲旺盛で、心も満ち足りていた」と書き、ロザリーとゼフィランを通じて、コーヒーや紅茶にも香水の匂いが混じ

---

<sup>33</sup> *Ibid.*, p. 1068.

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 853.

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 869.

<sup>36</sup> Colette Becker *et aliae*, *Dictionnaire d'Emile Zola*, Paris, Robert Laffont, 1993, p. 69.

<sup>37</sup> この台所の清潔さは、第二帝政期にナポレオン三世が主導し、民衆に施した道徳的・社会的教育の枠組みを思い起こさせる。当時のフランスにおいて、「清潔」は労働者階級から怠惰や反抗的態度を遠ざけ、健康や秩序、勤労意欲を引き出すものとして重視された。衛生への配慮が生活のゆとりや満足を生むと考えられたのである。この問題については、以下を参照。Julia Csergo, *Liberté, égalité, propriété – La morale de l'hygiène au XIX<sup>e</sup> siècle*, *op. cit.*, p. 44.

るブルジョワは持ちえない、素朴な人びとの豊かな感覚世界を謳う<sup>38</sup>。嗅覚と味覚とが両々相まって、この恋人たちは自然な形で幸福を見出すのである。

他の人物たちが、その幸福を享受することはない。エレヌは食堂で血色の悪いジャンヌを見ると心配になり、食事が一口も喉を通らなくなる。病弱な娘は母親を喜ばせようと食欲があるふりを装うが、ジャムを前にして顔を小刻みに震わせ、デザートも食べられずに涙を流す<sup>39</sup>。こうした光景を繰り返すエレヌたちが味覚を通じて結びつくとき、その媒体として選ばれるのはジャンヌの薬となってしまう。第三部において、エレヌへの不満を募らせるジャンヌは、用意された煎じ薬の微妙な甘みに難癖をつけ、「薬瓶のにおいを嗅ぎ、猜疑心をもって調べ」、「変なおいがする」と言って薬を拒否する。その場に居合わせたランボーは、ジャンヌの前で「とても美味しい」と言って薬を味見し、少女にそれを飲ませる。礼を述べるエレヌに対して、ランボーは肩をすくめて「お任せください、とても美味しいですよ」と返す。このやりとりでランボーは「とても美味しい」(C'est très bon)という凡庸な台詞を執拗に繰り返している。「美味しい」と形容される、この厭わしい液体によって、ジャンヌは脆弱な生を維持する。ランボーは一か月もそれを健康な体内に流し込み、エレヌ母子との不安定でいびつな関係を保つ<sup>40</sup>。

ランボーは、長年「アンチョビー切れとオリーブ半ダースだけ」という食生活を送ってきた。毎週火曜日にエレヌ母子と夕食を共にするものの、彼らの関係が食の快楽によって深まることはない。ロザリーの料理を前にしても、彼らは「幸福な味覚」を持つゼフィランとは異なる反応を示す。エレヌ母子とランボーの夕食に同席するジューヴ神父も「食するものに無頓着」で、「あまりに何も知らず、不注意」な人物であり、「美食の感覚が全体的に欠如している」<sup>41</sup>。その結果、彼らの会話では、ロザリーが用意した見事な魚料理もジョークとなる。

ジャンヌは目を輝かせて神父の様子を見守っていた。そのとき、料理が出された。

「とても美味しいわよ、このタラ」とジャンヌは神父に言葉をかけた。

「とても美味しいね」と神父はつぶやいた。「おやおや、確かに、これはタラだね。イシビラメだと思っていたよ。」

みんなが笑っているのを見て、神父は無邪気にその理由を尋ねた。ちょうど食堂へ戻ってきたロザリーはかなり傷ついた様子だ<sup>42</sup>。

薬をめぐる場面のように、この会話においても、彼らをつなぐのは「とても美味しい」(C'est très bon)という決まり文句である。それは食の深い味わいを語るものではない。「とても美味しいわ

<sup>38</sup> *Une page d'amour, op. cit.*, pp. 862-867.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 927.

<sup>40</sup> *Ibid.*, pp. 945-946.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 870.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 869.

よ」というジャンヌの言葉に対して、ジューヴ神父が「とても美味しいね」とおうむ返しに答えているにすぎない。豊かな感性をあらわすエレヌも、味覚をめぐっては何も語らない。結局、食堂で落胆するのはロザリーのみとなる。ここで、豊かな感覚に支えられたロザリーとそれを共有できない人々との相違が浮かびあがる。ジャンヌ、ランボー、ジューヴ神父が繰り返す「とても美味しい」は実質がともなわず、言葉そのものも妙味を持たない。彼らの味覚の乏しさに引きずられ、この感覚をめぐり豊かな語彙も生まれず、食卓での会話は同じ台詞によって引き延ばされていく。そして、この空虚な言葉によって、彼らは食味を楽しむロザリーを排除し、閉鎖的な人間関係を築き上げるのである。『パリの胃袋』などが明かすように、ゾラは豊富な語彙を用いて食に関わる新たな表現を生み出し、多くの小説の場面に食物のイメージをちりばめた作家であった。しかし、エレヌ母子、ランボー、ジューヴ神父の会話においては、あえてありふれた一言にとどめ、その台詞を連発する人物たちの特徴を巧妙に描きだしている。

乏しい味覚によって結ばれた人間関係は、第五部で描かれるエレヌとランボーの「理性的な」結婚生活にも影響を及ぼす。ロザリーとゼフィランは、食の行為とエロスの密接な結びつきをあらわす恋人たちであるが、彼らとは対照的に、菓を「美味しい」と言い、いかなる連想も生まない食卓を囲んできたエレヌとランボーは、食と肌触れ合う官能とは無縁な夫婦となる。実際に、ジャンヌとジューヴ神父の死を経て、喪服姿のエレヌとランボーが結婚するとき、妻が夫に見せるのは「大理石のように冷たい足」なのである<sup>43</sup>。

#### 4. 感覚と記憶の層

このように、作中人物の人生はさまざまな感覚を通じて複雑に織りなされている。その点において、第三部のノートルダム＝ド＝グラス教会で繰り上げられる聖母月の祭礼の場面は興味深い。祭礼に参列する女性たちは、各々の感覚を震わせ、その反応を強くあらわしている。

聖母月の祭礼にあたって、最初に反応するのはジュリエットである。彼女は自邸の庭の薔薇を残らず摘んで教会へ運び、花の寄付を行う。その寄付を通じて、「礼儀正しく、慎み深い、良い匂いのする人種である神父たち」と関わりを持ち、教会の庇護者として振る舞う<sup>44</sup>。ドゥベルル家から持ち込まれた薔薇は主祭壇のマリア像を囲み、教会は切り取られたばかりの花々の香りで満たされる。「穹窿の下にこもった息苦しい空気をいっそう重くする<sup>45</sup>」香りは、これらの花を捧げた人物を思い起こさせる。強い匂いで自らの存在を主張するジュリエットを意識させるのである。

宗教教育とは無縁に育てられたエレヌは、ジュリエットがもたらす匂いに惑う。視覚と聴覚に導かれるまま、暖かいローソクの煌めきや白い薔薇の冠を被ったマリア像、祭壇の前で揺れる香炉

---

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 1089.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 918.

<sup>45</sup> *Ibid.*, pp. 921-922.

を見て、聖歌に耳を傾ける。「聖歌隊員の朗々とした歌声」はエレヌの聴覚を刺激し、懊悩する彼女が「深く考えるのを妨げる<sup>46</sup>」。「愛と純潔の神秘」に陶然となったエレヌがアンリとジャンヌを伴って帰途につくと、クレマチスやライラックが咲き誇っている<sup>47</sup>。

オルガンが鳴り響き、大きな薔薇が芳香を漂わせる礼拝堂において、ジャンヌは過剰な反応を見せる。彼女は花の中央に置かれたマリア像に恍惚とし、興奮から「身震いをし、泣かないようにこらえる」。連祷で唱えられる愛の言葉と祭壇の薔薇に魅せられたジャンヌからは血の気が失せ、その顔は真っ白になっている<sup>48</sup>。

白い薔薇で埋め尽くされ、夥しいろうそくが燃え、妙なる歌声が響く、香りに満ちた教会において、彼女たちは「信心深い一か月」を過ごす。しかし、聖母月のお勤めが終わると、薔薇が持ち去られた祭壇は剥き出しの冷たい姿を晒し、ろうそくの火も香りも消え失せる。それと同時に、彼女たちは教会へ行く喜びを見出せなくなる。エレヌは「何も見えず、聞こえない」状態となり、花が持ち去られたのを悲しむジャンヌは、冷気が立ち込める教会で鈍い残響を聞き、頬を蠟のように真っ白にして、発作に襲われる<sup>49</sup>。

第五部におけるジャンヌの葬儀の場面は、この聖母月の祭礼を連想させる部分がある。葬儀の準備を引き受けるジュリエットは再び大量の花を用意し、棺の中のジャンヌを白い薔薇で覆う。聖母月の祭礼でジャンヌを引きつけた花は、ここに至って、少女の死の象徴となる。十字架や大きな蠟燭とともに安置される遺体は白い花々で覆い隠され、地面を埋め尽くす花の中にはヒヤシンスやライラックもある<sup>50</sup>。これらの花が白のシンフォニーを構成するばかりでなく、死者にまつわる感覚の記憶とも結びついている点に注意したい。薔薇のみならず、ライラックは聖母月の祭礼の時期にエレヌとジャンヌ、アンリに寄り添った花であり、さらにさかのぼると、エレヌ母子とダブルルル家との交流がはじまった頃に庭で芽吹き<sup>51</sup>、彼らが共に過ごした月日の中でこぼれそうな花を咲かせた<sup>52</sup>。そして、本論の第二章で見たように、ヒヤシンスはエレヌとジャンヌが初めてダブルルル家を訪れたときにサロンで飾られ、ジャンヌがその強烈な香りを記憶した花であった。

ジャンヌの棺が安置された場所では、これらの花の「芳香が立ち昇り、生暖かい空気の中をそよ吹く風もない」<sup>53</sup>。そこに佇むエレヌは、ジュリエットに黒いショールを着せられ、帽子についていた「赤いヴェルヴェーヌの花束」も引きちぎられている<sup>54</sup>。「ヴェルヴェーヌの香り」のエレ

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 917.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 924.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 916 et p. 918.

<sup>49</sup> *Ibid.*, pp. 926-927.

<sup>50</sup> *Ibid.*, pp. 1076-1077.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 820.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 884.

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 1077.

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 1076.

レーヌはもはや存在せず、彼女とジャンヌ、アンリとの別離が嗅覚の面からも強調されるのである。「ヴェルヴェーヌの香り」を失ったエレーヌは、彼らと共有した時間に漂った香りが混じるなかで、呼び起こされる数々の記憶をたどり、喪失を受け入れなくてはならない。この点において、ゾラは多くを語らず、「エレーヌの身体が震えだし、ランボー氏は恐怖を感じた<sup>55</sup>」という簡潔な一文で、主人公が瞬間的に発露させる激しい感情のみをあらわしている。感覚による共通の記憶を持たないランボーは、エレーヌが震える理由の全てを知ることはできない。身体を震わせるエレーヌがその場で拾おうとするのは一輪の白い薔薇であり<sup>56</sup>、ジャンヌの埋葬先の墓地で目を向けるのは、遊歩道の角で芽ぐんだ二本のライラックである<sup>57</sup>。これらの行為からは、作中人物の感覚が捉え、彼らの記憶の層を成してきた、一つ一つの小さな物語が浮かびあがる。ゾラはその層が剥ぎとられる瞬間を豊かなニュアンスをもって描き、うわべからはうかがい知れない、作中人物の滾るような思いや彼らを密かに繋ぎとめていた共通の記憶の数々を明かすのである。

## 結論

以上のように、『愛の一ページ』における感覚の問題を概観した。全体的に抑制された、静かな物語において、作中人物に起こる多くの出来事は彼らの五感に強く訴えるものとして描かれている。感覚をめぐる表現によって、蘇生される記憶や抑圧された感情、肥大する不安、ひび割れた人間関係などが露わにされるが、これらの場面でたちあらわれるのは、自分の感覚が快く満たされるのを願いながら叶わず、饒舌に語ることでできない物事と対峙し、多くの思いを体の中に澱として沈ませていく人間の有り様である。感覚の世界は、作中人物の生活における微細な変化や新たな展開の予兆を映しだし、物語の起伏や振幅も際立たせる。こうして、ゾラは経験が少しずつ沈殿していくエレーヌの人生を克明に描ききったのである。

---

<sup>55</sup> *Ibid.*, p. 1077.

<sup>56</sup> *Idem.*

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 1081.